

# 文化

## 沈黙に向き合う

沖繩戦聞き取り47年

石原 昌家

(59)

前回の「一読者の感想」は、本連載で「平和の礎」をテーマにするきっかけにもなった。1995年6月23日に除幕した「平和の礎」は、世界平和の心を沖繩から発信した。25年後の今日、「平和の礎」の存在はますます光彩を放っている。つい4月前の2019年11月8日、韓国での国際シン

### 3 「平和の礎」に係る刻銘の基本方針

#### 1 刻銘対象者

語法を問わず、沖縄戦で亡くなったすべての人々とする。

この場合、沖縄戦の期間は、米軍が慶良間諸島に上陸した1945年3月26日から降伏文書に調印した同年9月7日までとする。ただし、本島出身者については、瀬州軍要に始まる15年戦争の間中に、島内外において戦争が原因で死亡した者を含むものとする。

#### 【例示】

- (1) 1944年10月10日以降の空襲により死亡した者
- (2) 潜水艦、引揚船、疎開船等の遭難により死亡した者
- (3) 遺志命令や時限によるマラリア罹病等の疾病が原因で死亡した者
- (4) 1945年9月7日後、戦争が原因でおおむね1年以内に死亡した者(ただし、原爆被爆者については、その限りではない。)

「平和の礎」刻銘の基本方針(1993年10月 沖縄県「平和の礎」建設基本計画書より)

明快だった。沖繩住民をスバイ視・虐殺したり、死に追い込んだ加害者の日本兵と被害者である沖繩住民の名前を同じ敷地内で刻銘し、追悼するとは何事だということ、戦死した帝国日本の皇軍兵士を追悼するのは「平和の礎」の靖国神社化につながる、というのが主たる主張だった。それで私の研究室に数本、抗議の電話がかかってきた。とくに新聞論壇投稿の常連で詩人の肩書をもつ

### 平和の礎①

#### 批判・非難の根拠

市民は、4時間ほど電話で市の抗議をずっと続けたの

義が世界から認められているからだといえよう。しかし、その創設にむけては、沖繩県内で異論もあり、「刻銘検討委員会」の座長を務めていた私は一時、批判・非難の矢面に立たされてきた。最後は、摩文仁の丘に林立する各県の慰霊の塔が赤ペンキを塗られた事件を持ち出し、日本兵の名前の刻銘版も赤ペンキを塗られるか破壊されることになるだろう、という警告を残して

## 戦争拒絶の思想具現化

### 軍民、敵味方区別なく刻銘

#### 除幕前執筆

#### 根源

また、沖繩戦研究者でも同じような主旨で、講演や新聞の論壇をとおして熱意のこもった右原批判を、直接間接に展開していた。他の委員や沖繩県庁職員にもそのような抗議の電話などがあつたのかを確認しながら、私個人としては「平和の礎」への市民・県民の声を、当然「聴く耳」は持っていた。知事の意を受け、高山朝光知事公室長

除幕を前にして「季刊戦争責任研究編集部から、『戦没者刻銘碑「平和の礎」が意味するもの』(第8号 1995年夏季号)を置つけられていること。その「構想」の目的の肝要部は次のようになっている。「県民が沖繩戦と、その死没者すべての名前を一堂に会した、刻銘版に刻んでいけば、それぞれの名前をとおして具体的な個人を想像し、白骨累々の戦場を擬人化できる。つまり、戦争の惨禍を再現したかのようにみえる。

「平和の礎」は、日本軍人と沖繩住民を同一場所刻銘することに絶対反対して、座長の私を直接間接非難していた人々も、米英軍人の戦死者の刻銘には一言も異を唱えなかった。ということ

「平和の礎」は、戦争を拒絶する思想を具現化したものであり、その根幹には彼らも共鳴していたのだから、と連載中の今にして思う。(次回も除幕前に書いた内容とそれへの批判にふれていく)

(今回は4月後半掲載)

や平和推進課のもと、「委員会の合議の中で旧軍人の官位はすべて取り外し、上級下級の区別なく、すべて一人扱いにして、出身地別五十音順・アルファベットの順に刻銘することになった。

その結果、旧軍人の刻銘版への破壊警告は、除幕後ピタリと止んだ。それは市民・県民の声が、「平和の礎」に反映されたからである。その概要を以下に

意味するものを深く考える機会を与えられたので、除幕したらただちに証明されるであろう「平和の礎」の意を、除幕前に執筆しておきたかった。

それは深く考える機会を与えてくれた批判・非難された方々へ、今や国連で活躍中のゼミ生(新垣高子ゼミ長)ともどもさまざまな角度から検討した結果を明示しておきたかったのである。その概要を以下に

「平和の礎」建設にかかわった人々が、今でも異口同音に、「多くの住民を直接殺したのは米軍だが、その戦死した米兵の名前を刻銘することに異を唱えるのは一人もいなかったよ」と、こもこも述懐している。

実際は、日本軍人と沖繩住民を同一場所刻銘することに絶対反対して、座長の私を直接間接非難していた人々も、米英軍人の戦死者の刻銘には一言も異を唱えなかった。ということ

「平和の礎」は、戦争を拒絶する思想を具現化したものであり、その根幹には彼らも共鳴していたのだから、と連載中の今にして思う。(次回も除幕前に書いた内容とそれへの批判にふれていく)

(今回は4月後半掲載)